

**岡部真一郎 Shinichiro Okabe**  
 サロン、そしてティールマンとの共演で協奏曲をリリースして来たバティアシュヴィリの今回のパートナーはパレンボイム。2015年および翌年の夏、東ドイツ時代の放送局の施設をリノヴェーションしたベルリンのフンクハウス・ナレパシュトラエのスタジオでのセッション録音である。それぞれ、先立って行なわれた演奏会を受けて収録されたものという。シベリウス、第1楽章の色合い、あるいは緩徐楽章の密度は確かにこのヴァイオリニストの個性であると共に、パレンボイムの棒によるところも大きいかろうか。クールな中にも、熱いパッションと繊やかな表情が印象に残る。一方アルバム冒頭に置かれたチャイコフスキーは、バティアシュヴィリのこれまでのイメージからはいささか距離があるレパートリーかとも見え、実際、彼女は「この作品を避けて来た」と語っているようだ。しかし、というよりむしろそれならばこそ、フレッシュでありながら十分な奥行きをも兼ね備えた演奏である。カデンツァの強くもしなやかな表現はもとより、それに続くフルートとの絡みなどを始め、木管の小さなフレーズの数々、あるいは低弦の豊かさなど、細部に至るまで磨かれた雄弁なオーケストラの魅力も見逃せまい。第2楽章、あるいは終楽章の各セクションのテンポの設計とフィナーレへの大きな流れなど、パレンボイムのサポート、あるいは指揮者と独奏のコラボレーションがあつてこそそのチャイコフスキー、音楽創りという側面も決して見逃せまい。

**峰尾昌男 Masao Mineo**

【録音評】2曲間で約1年、間が空いた録音でエンジェニアも異なるが、会場とレコーディング・プロデューサーが同一であるため、よく揃ったコンセプトの音である。オーケストラは左右に綺麗に広がりが、しっかりと音色が展開する。そのわずかなぎりに独奏が音量大きくきりぎりとして、ソロ楽器のよいバランスのよい存在を示す。(93)



CD 25 26  
**チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲**  
**シベリウス：ヴァイオリン協奏曲**  
 リサ・バティアシュヴィリ(vn)ダニエル・パレンボイム指揮ベルリン国立管弦楽団(シュタツカペレ)  
 [グラモフォン]UCCG1754 ¥2800

む向きも多岐にわたるのではないかと、近年好まれるシベリウスのスタイルからは大きく外れた感がある。旧盤のオラモ指揮フィンランド放送響のサウンドが懐かしい。

リリースされたばかりだが、このアルバムの独奏者は幅広い活動で知られる高田みどり。作品の色彩、手触りをしっかりと守りつつ、そこから豊かな表情を生み出している。《協奏風狂詩曲》では若手、山根一仁が独奏を務め、フレッシュなアプローチで伸びやかな音楽を聴かせている点も目を引く。さらに《交響的エグログ》では、初演者であるばかりではなく、楽器そのものの開発、発展にも大きな役割を果たして来た野坂の熟達運びと音楽の奥行きが印象的だ。そして締めくくりに《リトミカ・オスティナタ》、大学時代、作曲家の薫陶を受けたという山田が、真正面から作品と向き合い、大きなクライマックスを形作る。何より、4曲を通じ井上のタクが21世紀の伊福部像をくつきりと描き出していることは特筆に値しよう。

**石田善之 Yoshiyuki Ishida**

【録音評】CD1がオーケストラとマリンバ、ヴァイオリンとオーケストラ、2が二十五絃箏とオーケストラ、ピアノとオーケストラと独奏楽器が伴うが、バランスとしてはソロを前面に積極的に聴かせる。二十五絃箏はオーケストラとの距離が若干ありそうだが、スピーカーで聴くうえでは明瞭感にたつきさしは十分に響きの美しさを際立させている。(93)

スガ流れの中でどこへ向かうのか明確に示され、音楽がより強固に、迷いなく進められているのを感じられる。30年の間に機能的な洗練を達成した東京交響楽団と、スコアについて綿密な思考を重ねた井上、両者の功績と云うべきだろう。

**相場ヒロ Hiro Alba**

【推薦】チャイコフスキーは第3楽章でアウアー版のカットを多数受け容れている一方、第1楽章ではカットをしていない。パレンボイムの指揮は、ベルリン国立管弦楽団のしつかり鳴らした低音部の上に築き上げる柔らかくも分厚い響きや、入念かつ濃厚に歌い上げながらも末梢神経をくすぐる感傷的な歌い口を排除して、雄渾な音楽を築いていく点がいかに彼らしい。バティアシュヴィリは最初の第1主題提示では息をやや短めに滔々と歌うことを控えながら弾き始めるものの、その後の経過部から自由な舞いがわずかに見え隠れし、第2主題提示からは豊麗なヴァイオリンと共にたつぷりと歌い上げる姿勢が前面に出てくる。以後テヌートを粘り気味にとり、かつ自在なレパートリーを交えて、大きなカンタービレを描きながら弾き進めていくが、それがベタベタせず骨太な印象をも感じさせるのは、パレンボイムの作る音楽に影響を受けた結果だろうか。シベリウスでのバティアシュヴィリも積極的な歌い込みが際立ち、2007年の旧盤と比べて表現がいちだんと深まった印象を受ける。ただしこちらに関しては、適度に大柄な身振りをみせつつも、軽やかかつシャープだった旧盤のアプローチを好む向きも多岐にわたるのではないかと、近年好まれるシベリウスのスタイルからは大きく外れた感がある。旧盤のオラモ指揮フィンランド放送響のサウンドが懐かしい。

**岡部真一郎 Shinichiro Okabe**  
 この2枚組は、2016年7月にミュンヘンで行なわれた「伊福部昭「協奏四題」と題された演奏会の「再現」とも言える企画の記録である。33年前の客席には、当時CMのほか「ゲルニカ」での活動でも脚光を浴びていた戸川純らの姿もあった記憶がある。プログラムにはその折と同じ曲目が並ぶ。東京交響楽団、そしてその指揮台に立つ井上道義は今も変わらぬ。ただし、ステージに上がった独奏者の中で再登場しているのは、箏の野坂のみである。《ラウダ・コンチエルト》は先月も塚越のライヴ録音が行



**伊福部昭「協奏四題」熱狂ライヴ**  
 ①オーケストラとマリンバのためのラウダ・コンチエルト②ヴァイオリンと管弦楽のための協奏風狂詩曲③二十絃箏とオーケストラのための交響的エグログ④ピアノと管弦楽のためのリトミカ・オスティナタ  
 井上道義指揮 東京交響楽団、高田みどり(マリンバ)山根一仁(vn)野坂操(二十五絃箏)山田令子(p)  
 [キング]KICC1342~3(2枚組) ¥3500

き手の意表を突くアイデアをあちこちに散らばらせたような調子を与えるなど、聴きすぎると、インパクトが弱められた箇所もあるけれども、俗に「くだけすぎず」に好演といえる。

**相場ヒロ Hiro Alba**

【推薦】井上は伊福部の音楽の非西洋的な性格を誇張することに関心がないようで、その演奏にしばしば聴かれるような、ことさらにサウンドをマッドに仕上げたり、発音のエッジを立てたりといった演出方法を採らない。《協奏風狂詩曲》第1楽章に登場する映画「ゴジラ」への転用部分を泥臭く響かせることなく、音の重なりを明快に説き明かしてあっさり通り過ぎるあたりには聴かれるように、トゥッティは音のバランスがよく吟味され、きちんとした音色を与えられているし、旋律は場面に応じて柔軟に歌い分けられる。そこから生まれるふくよか、柔相ですらあるロマンティックな味わいは、他の指揮者の演奏

一方の第2番では、第1楽章の深さ、表層の静謐の奥の力を始め、不気味なホルンの咆哮に始まる第3楽章の音楽の大きな振幅、その内なる力を掘り下げつつ、同時に全体の構成、構築性にも目を配りながら、太い流れを一本しかりと通していくあたり、このチェリストの天賦の才を何より感じさせるところとも言えそう。

**鈴木裕 Yutaka Suzuki**

【録音評】ダイナミックな力感のある感じと、繊細でなめらかな響きをも聴かせるワイラースタインの幅広い表現力、その演奏がよく捉えられている。マルチ・マイクの収録で、各楽器の音像は大きめになりつつ、音場感としては若干前後が浅いが、それぞれの細部の演奏までよく聞き取れる。音量をある程度上げて聴くと音色の整合性が取れてくる。(92)



**ショスタコーヴィチ：チェロ協奏曲第1番/同第2番**  
 アリサ・ワイラースタイン(vc)パブロ・エラス=カサド指揮バイエルン放送交響楽団  
 [デッカ]UCGD1439 ¥2800

【推薦】作品の性格もあろうが、特に第1番が面白く聴けた。ここでのワイラースタインは大柄に歌い上げるのではなく、速めのテンポを軸に弾き進める。第1番第1楽章では皮肉めいた調子を誇張せずに機軸性を前面に出して、むしろ簡素な弾きぶりをみせる一方で、第2楽章では表情を抑制して、深い歌を重苦しくなることなく全編に通わせる。カデンツァでは多彩な音色を解放して、ポリフォニックな書法を際立たせるなど、変化する思想を明快に隈取つてみせるが、終楽章では再び引き締まった身振りで、熱くなり過ぎることなく周到にクライマックスへと向かっていく。エラス=カサドはシャープなダイナミックスの表現を交えつつ、曲想に応じて管弦楽の色彩の濃淡を使い分けつつ独奏を支える点に巧みさを感じさせる。特に終楽章では、マラー的な多層的な書法を的確にとらえて音にする手腕に感心させられた。